

bonica f. cylindrica Evans に充てて居たが昨年夏信州乗鞍岳鈴蘭附近で再び同一のものを獲たので精査した處 フマルプロトセトラール酸 (PD+赤) の外にメロクロロフェア酸を含みグレイアニン酸を含む *Cl. borbonica f. cylindrica* とは異なることが判明した、他面本種は *Cl. coniocraea f. ceratodes* (歐州並に邦産) と酷似して外形丈では區別が困難である。所が是等の種は何れもフマルプロトセトラール酸を共通に持つて居るのでこれを常成分に取り上げ他を非常成分と考えれば此の三者は何れか已知種に取纏められないこともない、それにはもつと多数の標本を検討してデータを出して見る必要がある。

○柏をカシワということについての民俗植物學的考察 (前川文夫) Fumio MAEKAWA: Ethnobotanical consideration on *Juniperus* or *Sabina*.

松柏類という言葉に示される柏は廣い意味でヒノキ科の面々を指している。これをカシワと呼ぶことは萬葉の歌にもあるコノテガシワ (兒手柏) の示す通りである。しかし一般にこの柏は針葉樹以外のものにも通用し、ブナ科の面々を代表とする廣葉の樹木にも使用されることは柏餅やもとの一高の徽章の如くである。同じカシワであつてしかも殆んど共通点が見出されぬ程に形態の異なる二群の植物がどうして同一の呼び名を荷うかが私には疑問であつた。頃日萬葉植物の若干を検討する機があつてこの点について再考し、一つの考案を得たので次に記して大方の御批判を得たいと思う。

第一の手掛りは萬葉集にあつた。同歌集にはカシワと呼ぶ植物はたくさんにでてくるが植物學的に明確なものは次の四種であつて、しかも二系列になる。即ち

- { イワトガシワ (石迹柏) = 今のイワヒバ (7 卷 1134)
- { コノテガシワ (兒手柏) = 今のコノテガシワ (19 卷 3836)
- { ホホガシワ (保寶葉) = 今のホホノキ (19 卷 4204)
- { ミツナガシワ (御綱葉) = 今のオオタニワタリ (2卷 90 の左註)

各々の歌の中で占める植物の意義と位置を述べると一層判りよいがここでは省く、上の二者は柏の字を宛て、下の二者は葉の字を宛ててカシワと夫々讀んでいることに注意されたい。前者は針葉樹の形態であり、後者は廣葉樹の形態であることと一致し、柏を、即ち針葉樹の成物に單なるカシワの名があつたことも暗示される。

第二の手掛りは彌生式土器の中の一形態である。たとえば森本六爾氏の著書によると、或る奇妙な、しかし生活との關連の重大な一セットの土器がある。それは口が細く底のある外側が焼けこげた壺というのは細長い器と、ややじょうご状で底に大穴のあるいわば鉢の底の抜けた様な器と、今一つは大形の蓋物でこれも幾つかの穴があいている器との三つの組合せである。これは第一を水を入れて爐中に立て外側から熱すると湯になる。その口へ第二を重ね、中に芋、米等の食物を入れ、蓋をしておくと蒸すことがで

きるものである。ここで問題になるのはこの湯氣を通るが中味は下に落ちない様にする仕掛けがなければならぬ。ところがこれについては從來余り考えられていない。廣い葉を敷くことは穴を密閉してしまし又葉が軟くなつて内容の重味でずれ落ちてしまふ。私はここに針葉樹の中で柏の代表としての *Juniperus* ビヤクシン類が使用されたと思うのである。しかもネズやスギの様に痛い上に、米粒が間に入り混むものは不適當である。唯一の適者はビヤクシン、属を限定すれば *Sabina* (ビヤクシン) に限るのである。勿論二形葉が出るが少し古い株になればそれはでなくなるし、殊に北九州の壹岐、対馬にみられる鱗片葉型を主とするソナレ (即ち中井先生のイワダレネズ) 及び平戸島の礫岩や二三の朝鮮海峡の島嶼の斷崖にあるシンバクが考えられる。こればいずれも枝がもくもくしてこの枝を切つて穴をつめて、蒸すならば、実に格好の裝置になる。こうして *Sabina* を炊ぐ (カシグ) という仕事とむすびつけてカシワというに到つたのであろう。今一つ重大なことはビヤクシン (イブキ) が産地に乏しいことである。太平洋岸では福島縣迄自生しながら本州、四國、九州の沿岸を通じて殆んど自生がない。あつても高い斷崖に限る、しかも唯一といつてよい伊豆の大瀬崎では信仰の保護の下に驚く程の繁茂を見せているから砂礫の濱が、又氣候が生育に不適當では決してない。支那大陸から朝鮮半島に分布しながら中部以西の海岸に殆んど生じていない理由を上述の彌生式文化及び以後の炊事に枝を殆んど利用し竭して斷崖以外にはなくなつてしまつたということに私は置くのである。人爲が分布を大規模に乱したものとするとよく説明がつく、更にその上にビヤクシンをイブキという名でも呼ぶ理由は伊吹山に産するという風なことではなくて、上述の土器の中に詰めて、そこから盛に湯氣を吹かせる木即ち息吹き木 (イブキギ) であつたのだとみると全體に更に一貫性が通ずる。

彌生式土器を生んだ人達が北九州からその炊事様式を行いながら東漸し、ビヤクシンをイブキギとして純えず利用し、そうして遂にそれを殆んど採り盡して困却の揚句が二次的な廣葉樹としての他のいわゆるカシワを中心にしたものの代用へ轉じた。即ち先づ適當の *Sabina* がカシワ名を負い、ついで代用品の *Quercus* がカシワの名を荷つたのである。

一方オオタニワタリのミツナガシワについては、これが南方にないことと日本人が南方系であること、南方でこの葉で芋などをつつみ蒸し焼きにする習慣のあること上記の萬葉集に葉という總括名が使用されていることなどからこれがカシワの本體である可能性もある。恐らくビヤクシンとオオタニワタリが夫々獨立に平行して利用され、どちらもカシワの起りであるのであろうがこれは後者にゆずる。今は *Quercus* の所謂カシワは二次的のものであること、ビヤクシンのカシワギとしての利用の方が古くしかも今まで看過されていたことを、植物の形態、分布、名稱及び考古学上の遺物との關連に於て考察したのである。(東京大学理学部植物学教室)